

受給者：小柳眞理

所属：上智大学大学院博士前期課程 グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻

研究課題：日系移民にみる福島ディアスポラと日米交流の展開

## 研究背景および研究意義

明治元年以降続いた日本からの移民は、ハワイ王国やアメリカ、ブラジル等へと展開し、日系人は世界中に 300 万人以上いるとみられている。移民を多く輩出したのは主に山口や熊本、沖縄など西日本以南だが、その中で福島からは東日本で最多、全国では 7 番目に多い 2 万 8000 人の移民が北米や南米に移住している。その理由には戊辰戦争での敗戦、東北大凶作などが背景にあり、西日本の移民とは「貧しさ」の共通項はありながらも、歴史背景・時期ともに様相が大きく異なっている。

先行研究において日系人は多様な視点で研究されており、その蓄積も厚い。他方、移民初期において圧倒的多数かつ中心的な存在であったのは山口・広島を中心とした西日本からの移民であったことや、アイデンティティの探求や文化継承活動が活発なのは沖縄系の移民であることなどから、「東日本からの移民」は日系人研究において周辺的な位置づけであることが多い。

本研究は、福島をルーツに持つ日系人の歴史と変遷を探るとともに、ハワイの福島系移民と日本側との交流、東日本大震災時の支援等に着目し、彼らが祖先の故郷である「福島」をどのようにとらえているのか、その様相と要因を探るものである。日系移民の歴史とその実像、日本とアメリカの橋渡し役を担う状況を考察し、海外の「福島ディアスポラ」に着目する本研究により、日系人の歴史的変遷やアイデンティティの様相を、新たな視点でとらえることが可能となる。本研究は、これまで日系人の研究の中で「後発組」であり「マイノリティ」であった東日本からの移民に着目することで日系人のもつ複雑性や多様性を提示し、新たな視点を提供しようと試みるものであり、今後の日系人研究にも大きく寄与するものであると考える。

## 現在までの研究で明らかになったこと

今回の 3 冊の書籍資料の購入と福島県における福島県人会幹部との面会により、日系移民における福島移民の位置づけや歴史的変遷、東日本大震災時の状況と日系人からの具体的な支援の状況を確認することができた。

まず、書籍や文献を通じた調査においては、明治元年の「元年者」、官約移民、呼び寄せ移民、自由移民等の変遷や時代的背景、その後の展開等、日系人全体や福島からの移民をめぐる状況についての基礎的情報を確認するとともに、福島に特化した歴史考察や手記を通

じて、他では得にくい情報を得ることができた。特に、全国的には明治元年に始まった移民の流れの中で、福島は明治 31 年の開始と非常に遅かったこと、移民の動機としては、明治 30 年代の「東北大凶作」が大きく影響していることのほか、会津藩の子孫は主にハワイ島に、福島北部の人々はオアフ島、マウイ島に行った人が多いこと等、県内でも地域的に行き先が分散していた初期の移民の様相を確認することができたことは、論文執筆にあたり、大きな意義があった。また、東日本大震災と外国人移住者に関する文献においては、震災当時、東北に住んでいた外国籍の人々が置かれた状況や支援の様相を、当事者による記録などを通して確認することができた。震災時に日系人が実施した支援の様相や、何が支援を決意させる動機となったかを探る上で重要な示唆を与えてくれた。

また、県人会幹部へのインタビューを通し、▽ホノルル福島県人会が今年（2023 年）に結成 100 周年の節目を迎えること、▽2023 年 11 月にホノルルで福島県幹部を招いて大規模な祝賀会を計画していること、▽日本語で書かれた、福島からの全移民の写真付きプロフィールの英訳プロジェクトなどが進行中であること、▽東日本大震災の際、ハワイの日系人が福島県から避難民 120 人を無料で受け入れるプロジェクトを企画し、実際に 60 人余りが 1～3 か月間、マウイに避難したことなど、県人会の具体的な活動が確認できた。さらには、関係者しか所持していない文献や資料等の提供を依頼し、承諾を得ることができた。今回の面会は基礎的な情報の収集と活動等の確認が主であったが、今回、直接言葉を交わし、協力を確認できたことは、今後研究を進めるうえで大きな意義があったと考える。

これまでの調査を踏まえ、今後、資料のさらなる収集と構成の具体的な検討、インタビュー項目の精査等を早期に実施する方針で作業を進めているところである。